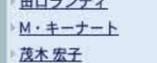


吉野紗香と、桐島ローランドの、コラムを連載中です！
 コレで絶対成功！ Windows XP 乗り換えのツボを公開


 日本唯一のオフィシャルサイト

戦場と化したニューヨーク

2001年9月13日 吉田 朱見

チャンネルトップへ
 実質年率9.7%～12.6% ORIX VIPローンカード
 抽選で旅行券等が当たる！


バックナンバー
 田口ランディ
 M・キーナート
 茂木 宏子
 吉村 作治
 佐保 暢子
 鈴木 真二
 メール配信サービス

気になる Click here
 日経平均株価はここぞで
 新ポートフォリオは 便利な機能満載！
 すぐにあなたも登録を

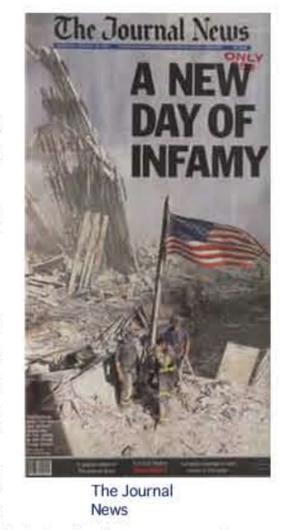
衝突時はニューヨーク・ミッドタウンのオフィスにいた。1機目の追突の話を、遅れてきた社員から聞き、外に飛び出すと、ダウンタウンから離れていたにもかかわらず、五番街から、事件の様子が見えた——MSNジャーナルでアメリカリポートを書いているジャーナリスト吉田朱美さんが衝突時のニューヨークの様と人々の様子をレポートする。(MSNジャーナル編集部)

"ワールドトレードセンターからすごい煙が上がっているって！"
"飛行機がぶつかったって？"

オフィスの人々が騒ぎ始めたのが、朝の9時頃。この時点ではまだみんな事故だと思っていた。ニューヨークの象徴の一つであったツイン・タワー（ワールドトレードセンター）のノースタワーに1機目が突っ込んだのが8時48分。マンハッタンから川を隔てて東側に位置するブルックリンからの通勤者達を運ぶ電車がちょうど橋を越える時間であった。マンハッタン・ダウンタウンが見渡せるこの橋を越える電車の中から多くの人達がノースタワーの煙を見上げたのである。そしてその18分後、2機目が今度はサウスタワーに突っ込んだ。1機目はボストン発口サンゼルス行きのアメリアンエアライン。2機目はユナイテッドエアラインの、同じくボストン発口サンゼルス行き。こんなに大きな機体がまるで吸い込まれるようにビルの中央部に消えたと思った瞬間、ビルは炎と煙を吹き出した。あまりの惨事の大大きさに神経がついていかず、まったく不謹慎だが、なんだか映画を見ているような気分になった。悪いニュースはそれだけで終わらず、9時40分、アメリアンエアラインがワシントンDCの米国国防総省に突っ込み、もう1機がペンシルバニア州ピッツバーグ近くに墜落した。合計4機、すべてハイジャック機である。

砂ほこりまみれで歩いて橋をわたる

ワールドトレードセンターから道を隔てて向かい側に建つワールドファイナンスセンター。同ビルの22階のオフィスに勤めるFさんを含む社員達は、1機目が隣のビルにぶつかる瞬間の大きな爆撃音を聞き、みんなが窓に集まった。この時はみんな火災だと思い、コーヒー片手にのんきに頂上近くから吹き出す煙を見上げていた。



The Journal News

が、その目の前で2機目がもう一方のサウスタワーに突っ込んだのだ。爆発とともに多くの人がビルからまるで人形のようにほうりだされていく光景を目前にして、興味は一瞬にして恐怖に変わった。この時点で避難警報はまだ発せられていなかったが、全員が非常階段に向かい、ビルの外に脱出。ビルの回りは避難者と見物人達で身動きできないほどであったが、Fさんは恐怖のためにパニック状態に陥っている友人をかばうようにして、とにかくビルから離れようと、川沿いをアップタウンに向かって歩き始めた。

そして、途中で振り返ると燃え盛っていたビルは砂でできた模型のように一瞬にして崩れ落ち、一帯は火山灰のような白い砂で被われた。地下鉄はもちろんのこと、すべてのダウンタウンエリアの交通は麻痺（まひ）し、Fさんが人込みを分けながら徒歩でミッドタウンの自宅に逃げ帰ったのは約2時間半後のことだった。200丁目近くに住むAさんも、自宅までの20キロを歩いて戻った。普通、歩いて帰れる距離ではないが、頭の中には家に戻る以外何もなかったのだ。

2機目の追突の後、エンバイヤービルや国連ビルなど、標的となりうる建物では避難命令が出て、すべての人をビル外に出した。被害が及ばなかったミッドタウンでも、会社の多くは業務を辞め早急に社員を帰したが、マンハッタンから外に出る橋はすべて閉鎖されてしまったため、クイーンズ地区やブルックリン地区、ニュージャージーなどマンハッタン外に住む人々が家に戻る唯一の術は歩いて橋を渡ることであった。その日、砂埃（ほこり）にまみれてダウンタウンから避難する人達、早退して帰宅を急ぐ人たちなどで、各所の橋はあふれんばかりになった。

出て行け！と銃をもって叫ぶ警官

ミッドタウンにある交通の中心、グランドセントラル駅にもすぐに警官が到着し、人々を一時外に避難させたが、拳銃を持つ警官達が"Get Out！（出ていけ！）"と叫ぶそのあまりの迫力の方に恐怖を抱いた。ショットガンを持つ警官も中にはおり、"ここは法治国家か？本当にニューヨークか？"と思わず呟いたほどである。

歩道には帰りたくても帰れない人達があふれ、そのフラストレーションはどこにも行きようがなかった。歩道に集まるこれだけの人数の人達を見たのは初めてである。ウエストチェスター郡やコネチカット州からの通勤者達を自宅に戻すため、このグランドセントラル駅から限られた本数で電車が出されることになったが、電車内で隣り合わせた女性はワールドトレードセンターに勤務する人で、オフィスが下の方であったため、なんとか早めに避難することができたと語った。彼女も歩いてダウンタウンからグランドセントラル駅にたどりついたが、ちょうどその時グランドセントラル駅では警官が人々を外に避難させている最中で駅内に入ることがかなわず、約10キロ先の次駅まで、また歩かなければならなかったという息を切らせていた。

しかし、そうして歩いてでも、電車に間にあった彼女はラッキーであったと言わねばならないだろう。"私はもう絶対ワールドトレードセンターでは働かないわ"興奮して彼女はそうわめきたてたが、働きたくてももうあの有名なビルはなくなってしまったのだ。



USA TODAY

敵が誰で、どこにいるか分からない恐怖

ケーブルテレビを含むほとんどのチャンネルがこのテロ以来、その後の様子を刻々と流し続けている。テレビ、ラジオで真珠湾攻撃が引き合いに出され、"その時よりもひどい"というコメントが相次いだのには少々驚いたが、考えてみれば、アメリカが外から国内をひどく不意打ちされたのは、史上、真珠湾とこのテロの2つだけといってもいいのかもしれない。テレビに登場したある専門家の話では、真珠湾の時は敵が誰で、どこにいるか分かっている分、今の状況よりは簡単だったとコメントしている。



NEW YORK POST

また、最初に負傷者達が運び込まれたマンハッタンのセント・ビンセント病院はすぐにパンク状態になり、各所に避難センターも設置された。テレビやラジオでは医師や看護婦のボランティア提供と一般からの血液提供をずっと呼び掛けている。ニューヨーカー達のボランティア精神には感心させられることが多いが、血液提供者はあつという間に予想を上回る数が集まった。こういうところは本当に脱帽させられる。惨事直後には、休暇中の消防隊員や警官への出勤も呼び掛けられたが、ニューヨーク以外からも多くの助っ人が集まってきた。ただ、現時点で出勤した消防隊員のうち約200人の命が奪われたことが分かっているのは、悲報以外のなにものでもない。

正しいこと、と正しくないこと



The New York Times

一方では、東エルサレム近くのウエストバンク地区に住むパレスチナ人やレバノン人の子供達がアメリカ側のダメージを祝って祝い菓子を片手にVサインをしている光景など、アメリカ人達の神経をさかなでするような映像も流されているが、こういうところを見るにつけ、"正当"というものがひとつでないことを知らしめられる。我々が"正しい"と信じていることは、彼等には"正しくない"のだ。しかしこれは、宗教の違い、価値観の違い、文化の違い、などで簡単に片付けられる問題ではないはずだ。

7年前のワールドトレードセンター爆破事件を覚えている人も多いと思うが、その時の主犯テロリストであり、一級の指名手配者、オサマ・ビン・ラディン氏 (OsamaBinLaden) が今回の事件の主導者であると唱える説があるが、別のチャンネルではそれを決めるのは早すぎるとの意見も流れている。現在、FBIが米国内中を探っており、今回のハイジャックで飛行機を操縦したであろうとされている人物を教えたというフロリダのパイロット学校の教官も現れたとのニュースも流れた。テレビでは次々に新しい情報が入ってきており、その内容は刻々と変化している。

身内を探して路上をさまよう人々

しかし、路上では今も連絡の途絶えた身内や知り合いを探して、病院を巡っている人達が大勢いる。ワールドトレードセンターには日系の企業も約30社ほどオフィスを構えており、そのほとんどが社員全員の無事を確認しているが、現時点で日本人で行方不明になっている人が約20人ほどいるというニュースが入っている。もろく崩れ落ちたビルを見た後では、絶望的な気持ちにはかならないが、できることなら1人でも多くの命が助かって欲しいと願わずにはいられない。

ニューヨーク市長ジュリアーニやブッシュ大統領などは、この惨事の犠牲者に遺憾の念を表すと同時に、いかにニューヨーカーが、アメリカが、逆境に負けない強い国民、そして国であるか強調し続けている。が、9月11日のこの惨事がアメリカ人に与えた影響は半端なものではない。戦争が終わって生まれた世代の1人として、いかにいままで平和を満喫してきたかを、改めて感じた日となった。これを機にまたアメリカは、そして世界は変わるだろう。しばらくはニュースから目が離せない日が続くことになる。

(9月12日、ワールドトレードセンター崩壊翌日)



DAILY NEWS